『マリアンヌ』小論
——エロードの愛——

野池恵子

トリスタンによる悲劇『マリアンヌ』は、１６３６年にマレー座で上演され、翌３７年に出版された。当時の名優モンドリーの熱演もあって、大成功を博している。ランカスターによると1659年から1680年までにモリエール劇団によって３９回、1680年から1703年までにコメディーフランセーズによって３４回上演され、息の長いレパートリーになっていた(1)。又、テキストの方も初版以後数多くの版が重ねられていることを考えあわせると、『マリアンヌ』がどれだけ１７世紀の人々の関心を集めていたか充分推測できる。一方当時のそうした評判と並んで、『マリアンヌ』は文学史面からも、専門家達の注目の的になっている。シェレルは『フランスにおける古典ドラマツルギー』(2)においてメレの『ソフォニスブ』と『マリアンヌ』が、後に流行する悲劇の基礎を作ったと考えているし、ベルナルダンは『トリスタン.レルミット』(3)で、トリスタンを生涯及び作品の二方向から分析し、ラシーヌの先行者としての特質を考察している。又、ランカスターは『ミトリダートの死』及び『リュクレウス』や、特に『マリアンヌ』を、『ソフォニスブ』と共に心理の発展に力点を置いて書かれた悲劇とし、当時の一傾向になったと考える。そして「『ソフォニスブ』程徹底して古典的ではないが、『マリアンヌ』は人の胸に訴える力を持つ女主人公ばかりでなく、『ル・シッド』以前のフランス悲劇における最もドラマティックな性格をエロードの人物中に有している」(4)と評価している。古典劇の形成途上期に位置する『マリアンヌ』は、同時期の他の作品と共に様々な観点から検討されうるものであろう。

トリスタンの『マリアンヌ』に先行する作品として、アルディの『マリアンヌ』がある。1600年頃上演されたと推定され、1625年に出版されている。トリスタンは、アルディの戯曲集のために二篇の詩を作った。ベルナルダンも指摘している通り、トリスタンは自作を執筆する際、先行作品を参考にしたと充分考えられる。

ここでトリスタンの『マリアンヌ』を分析するにあたり、アルディの作品を折にふれて比較参照することにしたい。出典を探ることが目的なのではなく、唯、トリスタンの独創性をより明確な形で提出したいと思うからである。

ところで、エロードは絶対権を握る王であり、彼の決定事項がそのまま劇進行の契機となる立場

にいる。戯曲のタイトルはマリアンヌだが、実質的な主人公はエロード王である。従ってエロードの心理の進展を追うことで、戯曲の構造を把握し、結末に導くものが何であるかをこの小論で探りたい。

*　　*　　*　　*

(1)　『マリアンヌ』の提示部

Ⅰ幕は、冷汗を流して悪夢から目覚めるエロードの台詞で始まる。後述される内容から判断すると、色鮮やかで、呼び声まで聞き取れる生々しい夢である。おぼれた時飲んだ水で体がふくれあがり、赤紫色になったアリストビュルが、恐ろしげな形相をし、髪から水を滴せたままエロードの夢に現われて、王を呪ったのである。亡霊がエロードの悪行を責め続け、自分の存在を膨張させて行くと、エロードは耐えられなくなり、精神の安定をはかるため最大限の力を払い、亡霊に打って出る。その一撃が空を切った所で王は目覚めた。夢、つまり虚像の恐怖から自分の力で現実界に戻ったことになる。エロードが以上のような悪夢にうなされたということは、彼が抜き差しならない危機の状態に陥っていると考えて良い。実際Ⅰ幕の後半で、我々はエロードの愛が王妃に徹頭徹尾拒否され、行き場がなくなっていることを知る。

アルディの『マリアンヌ』では、アリストビュルの亡霊が実際に舞台に登場し、呪いの言葉を自分の口から吐いた。その試みは舞台上にスペクタクルとしての面白さを生みだしはしようが、劇の筋とは直接結びつかない。亡霊を夢とし、エロードの強迫観念として登場人物を整理したトリスタンは、結果として、エロードの心理時間に深さを与えることができた。

エロードの夢は王妃の冷淡な態度が原因となって生まれた。愛を受けいれてもらえない為である。この王妃マリアンヌは、先王イルカンの娘であるが、親兄弟をエロードに殺害された為、夫を憎み続けている。王族出という血筋の誇りも強く、平民出のエロードを蔑視する。身の安全の為に愛する振りをしようともしないし、義妹サロームの陰謀に気付いても、アルディのマリアンヌのように非難するところまで身をおとしめたがらない。侍女の忠告を無視して、あくまでも王妃としてのモラルを守り通そうとする。しかし、彼女にはエロードとの間に既に子供があるし、彼が感謝するような忠告を与えた事もある。従って、マリアンヌがいくら毅然としていようと人物の全体像は曖昧である。重要なのはエロードにとってのマリアンヌがどういう人物だったかであろう。最初に言える事は、彼女が美しいという点である。彼女の美しさは、下記のように形容される。

> 私の愛する神にも似た女性(ひと)が、石にたとえられるなら、それは雪花石膏、快い暗礁。その内に、自然が私を誘惑しようとして作ったすべてのものが光り輝くのを、人は見る。彼女の唇

ほど赤いルビーはなく、触れるものすべてに琥珀の精をまぜあわす。瞳のきらめきは、少なくともダイアモンドと同列に置くのを認めよと、私に望んでいる[5]。（Ⅰ－3）

ここでマリアンヌが、雪花石膏、心地良い暗礁、ルビー、ダイアモンド等の冷たい感触を持つ鉱物にたとえられることに注意したい。又、彼女が全宇宙を包みこんでしまえる程、悠々たる存在であることにも注意しておきたい。

マリアンヌの精神面に目を移してみよう。

あのつれなさすべての由来するところは、彼女の操正しさだ。実に、彼女の尊大な気質も善意にあえれている。（Ⅰ－3）

というエロードの台詞がある。彼は、王妃を厳しいとする一方、それも善意があってのことだと評価している。エロードは、マリアンヌの精神面のうち、鉱物のような人を寄せつけない冷やかさまでを彼女の長所とし、

本当のことを言えば、彼女があなた方の間にあって、いくばくかの威厳を兼ね備えているのは、全く正当なことなのだ。（Ⅰ－3）

と言って、マリアンヌに威厳のあることを、ほめている。

しかし、このようなマリアンヌ像は、現実のマリアンヌではない。外側から眺めたマリアンヌを材料にして作った永遠の女性像と言える。エロードはそういった作業を自とやってしまう視覚的人間で、例えば王妃への伝言をソエムに託す時、王妃の反応を逐一報告するよう命じている[6]。自分の考えを定めるのに、相手の返事の内容よりまず第一に、いかなる反応を示すかという視覚面での反応に多く興味を持つのだ。

エロードは武勇にすぐれ、年少の頃から戦功をあげた英雄である。相手を倒すまで力を出し尽くし、自分の死に行き着くまで戦いやめない。あくことなき欲望にかられて戦さから戦さへ渡り歩くのである。エロードはこの英雄としての、肉体をかけた征服欲を、恋愛面にそのまま移行させている。そして、観念の中に住む恋人を現実に手に入れようとする時のエネルギーにしている。

エロードにとってマリアンヌは、以上の通りである。ここでもう一人の女主人公であるサロームについて述べたい。彼女はエロードの妹で、品性の点から言うとマリアンヌとは対照的な女性である。スパイをし、毒殺計画をでっちあげてマリアンヌを失脚させる。自分の地位の保全という目的の為なら手段を選ばない。エロードは、全宇宙にも等しいマリアンヌを観念の中に描き出し、彼女を我が物にせんとして情熱を高めるが、拒否されてしまう。そういう時、マリアンヌは国家にとって危険な人物なのだという声がサロームの口から聞こえてくる。もともとエロードは、戦場の英雄としての過去、繁栄する王国の主である現在の延長上に、宇宙の征服を企てている。従って土台の

王国は何時までも栄えていなければならない。マリアンヌが危険であるなら、エロードは彼女から国を守らなければならないのである。従って、サロームはエロードをマリアンヌから引きはなし王としての公的立場を強く認識させる役割を持つ。整理すれば、ちょうど二女性の間にエロードがはさまれた形になる。そして一方のマリアンヌが王の観念界に息吹きを与えれば、一方のサロームは王に義務を思い出させようと躍起になる。エロードは、マリアンヌに近ずくが拒否されてサロームと同じ意見になり国を守ろうとする。しかし再び情熱が昂まってマリアンヌの方に向かう・・・・と言った往復運動をエロードはしている。これに関しては、典型的な例を後に示すことにする。

Ⅰ幕冒頭の夢に関連して、考察の対象がもう一つある。それはエロードが悪夢を逆境の予告と受け取り、運命の軌跡を敷き変えることができないのではないかと疑う点である。

> 運命神が書き記したことは、消し去り得ない。好もうと好まざると、果断な人間は、神の絶対力がつけた跡をたどらなければならない。（Ⅰ幕３場）

人の世の盛衰はすべて運命神の思うままで、人々の介入できる領域ではないとする諦念を持っている。この悲劇の始まる前に、エロードは数多くの戦功をあげていた。そしてエルサレムを平和な町にし、アウグスティヌスも彼に支援を惜しまない程の勢いとなった。自分の力で戦い、自分の力で王冠を入手したという自信を持っている(7)。従って、自分の力を行使する術を知っている一方、それも運命の神の助力があったお蔭だとエロードは考えていることになる。恋愛面では前記したように不遇で、自分の力を行使できず、

> 当然のことだ、私の気分が沈んでいても。私の栄誉は夢まぼろしにすぎず、私の偉大さも名ばかりだけ。

という結果に陥っている。全宇宙を支配したいという絶対的な欲望もマリアンヌの拒否にあって坐礁してしまう為、現実の方が現実感を失ってしまったのである。この夢の受け取り方は、エロードの心理の往復運動に大きな影響を与える。それは、(2)及び(3)で説明したい。

(2) エロードとマリアンヌの対決の場

エロードとマリアンヌの対決を観客が見るのは２回だけである。しかし１回はエロードがマリアンヌを自分の寝室から追い出す場で台詞はないから、正確に言えば裁判の場一つになろう。Ⅲ幕２場である。

それに先立つしばらく前に、エロードが王妃とけんかわかれをして怒りが極点に達している時、サロームは好機を得てエロードに会いに来、王妃がいかに危険な存在であるか説明した。サローム派の密告者が王妃を毒殺計画のかどで訴え出るのもこの時だ。エロードは愛の情熱を、今度は国家

を守るという理由で、マリアンヌを罰する方向に燃焼させる。それも裁判官がいる法廷においてである。アルディの作品では法廷と指示されていても、裁くのは王一人で第三者の声が聞けない。トリスタンの場合も王が最終決定を出すのであるが、裁判官も意見を述べるという点では私情を捨てようという公正さが打ちだされている。恋愛するものの私的立場と、王としての公的立場がはっきり分割されているため、マリアンヌ＝サローム間の心理的な往復運動がより明らかな形で現われる。エロードは法廷で、王国の受けた侮辱を清め有罪者を然るべく罰そうと決意して、サロームの側に立っているが、マリアンヌの姿を一目見ると自信がぐらつく。怒りを直接ぶつけず、罪を曖昧にほのめかすだけだ。アルディの同じ場面が強烈な非難の言葉、「不忠な暗殺者、裏切り者‥‥」(8)で始まるのに比べれば、トリスタンの手法は怒りを行為としてそのまま外に出す時の効果をめざしたのではなく、エロードの複雑な心理を表現する前のプロローグなのだと理解できる。

トリスタンのエロードは、密告者とマリアンヌの二人に直接話し合いをさせ、平静を保って毒殺計画の有無を解明しようとする。彼が怒りを外に出すのは、マリアンヌが親兄弟の殺害にふれ、エロードの過去を非難した時になってからだ。その時エロードは、始めてマリアンヌをののしり、即刻裁判官の意見をまとめてしまう。その日の朝みた悪夢を逆境の前兆とエロードは見なしていたので、悪夢の内容にふれられた時、身の破滅を察知し、危険人物を取り除く方向に進んだと解釈できる。エロードはマリアンヌに同情的な裁判官を罵倒し、死刑判決を下す決意だが、そこで王妃は孤児になってしまう我が子を思って涙を流してしまう。彼女は一貫して冷淡な態度を堅持していたが、ここでエロードに体温を感じさせた。エロードが見ることで作りあげて、観念の中でいつくしんでいた冷たい偶像が実際に涙を流し、人間の息吹きを感じさせた。彼は脳裡に広がる宇宙が息を吹き返したので、すぐさまその虚像に従い、マリアンヌを許す方向に歩みを逆転させてしまう。マリアンヌが死んでしまえば、観念の世界も糧を失い、エロードも生きていられなくなる。虚構の世界を現実化しようという生き方である。しかし王妃の方は、エロードの許しをはねつけ、エロードの監視的な態度がいやだとほのめかす。ここでエロードは再びマリアンヌにはねつけられて歩みを逆転させなければならなくなる。今度は王妃の姦通を疑い、愛の情念は嫉妬心になって燃えあがる。ところが直接マリアンヌに質問はせず、彼女を牢にとじこめてから、相手の男、ソエムに詰問してゆく。

トリスタンのエロードが、毒殺計画や姦通についてマリアンヌと台詞の応酬をするのは２４４行からなるⅢ幕２場だけである。アルディの作品ではⅢ幕半ばからⅣ幕に渡ってなされ、それも二度にわけられている。前記したようにアルディのエロードは、マリアンヌが現われるやののしり始め、毒殺計画の有無について詰問する。又、彼女の返答についても逐一理由を尋ねる。姦通を疑うと、まずソエムの手下を呼び出し、執拗に肯定の解答を求める。次には王の命令が何故もれたかという

点でも論議され、本題に入るまで時間がかかっている。Ⅲ幕が終り、姦通が否定されるまで２５４行の台詞があるが、この間エロードは一貫して嫉妬心と怒りに燃え続け、心理時間の深さに欠けている。対決の後半はⅣ幕２場で再開される。マリアンヌが姿を現わす前に、エロードは復讐すべきか、愛に殉ずるべきか迷い、王妃の死は自分の死に等しい運命であると悟る。すべては王妃に会った後決めることにするが、トリスタンのエロード程、原因が明確ではない。つまりⅢ幕とⅣ幕の間に一夜が明けていて、その時間が、いら立った王の気持を和らげ、場合によっては許してもよいという気持にしたと考えられるものの、トリスタンのエロードのように、王妃の涙に心を動かされたというはっきりした原因が明示されていない。疑いが生じたと同時に裁判を開廷し、死刑判決を下したトリスタンのエロードの方が、いますぐでなければならないとする心理状態が明瞭である。

アルディの作品に戻ろう。エロードはⅣ幕で裁判を開廷するが、その間王妃と二人で話をする為に人払いをする。そこで過去の愛を忘れられないから許したいと申し出る。トリスタンの作品と同様、子供の話が出るが、王妃は特にそのことで泣かず、子供達が父親を復讐するだろうとだけ予言する。それが、エロードに死刑判決を下させた。トリスタンのマリアンヌは、唯、毅然としているのだが、アルディのマリアンヌは、王の言葉の一言一言にひっかかっていく部分が多く、むしろ二人の論議は単なる力のぶつかりあいになってしまっている。Ⅲ幕後半部とこのⅣ幕でほぼ４００行以上に渡って論議が繰り返されるが、トリスタンは２４４行を費やすだけで、エロードの心理の揺れを、情熱のおもむく先の移動を書きこめたと言える。

(3) マリアンヌの死後

トリスタンのエロードはマリアンヌが死んだ事を知る前に、決意を二度ひるがえしている。裁判の時理性に基づいて判決を下し得たことを天に感謝するが、いざ決定してみるとそれは自分自身の死をも意味していることにもなるので、死刑をそのままにするか救済するかの二者択一にせまられる。「私の考えは、二つの相反する部分に分けられて・・・・」[9]と言っている。エロードは、観念上の宇宙にむかってまっしぐらに進みたいが、それに必要不可欠なマリアンヌが、王国に危害を与える。現実のマリアンヌは、永遠の女性という役割を果たしてくれない。まだ自分の名誉が汚されてないまっさらの青年時代を思い出し、時間を戻してもう一度生き直したくなる。マリアンヌの姦通を疑った時も、

どうして、若い時に私は死ななかったのか？（Ⅲ－２）

と言って生き長らえたことを後悔した。エロードの絶対を求める態度がうかがわれる台詞である。

エロードがマリアンヌの死刑を取りやめ、牢に監禁するだけにとどめようとする時、王家の守備

隊であるサローム、フェロール姉弟は、言葉を尽くしてエロードに思いとどまらせる。結局、マリアンヌは悪夢にでてきたアリストビュル等の復讐を必ずする、アウグスティススが死去したら、民衆と共にマリアンヌが立ちあがるかもしれないとおどかされてエロードは死刑の方に向きを変えてしまう。

V幕1場で、エロードは、マリアンヌを許そうとする二度目の意図を我々に明らかにする。マリアンヌの処刑が終了しているのを彼はまだ知らない。自分の嫉妬深さを反省し、犠牲はソエムだけで充分だと考えた。それにサロームもフェロールもそこにはいない。彼はマリアンヌを失えば、自分も死ぬほかないと思う。ところが、そんな死に方では満足できない。彼には生死をかけて求めているものがあり、それこそがマリアンヌという大きな宇宙なのだ。エロードは再び観念の世界を具現しようと情熱を昂めあげたが、そこでマリアンヌの死を知らされる。

アルディは、裁判後、エロードの決意を一度も変更しなかった。トリスタンにおけるエロードの意図変更は、エロードの内的世界に深さを与えると同時に、彼の錯乱の伏線を用意したと言える。

トリスタンの作品では、王妃の死を知ったエロードは正気にとどまる前半と、錯乱して狂気に入る後半にわけられる。観念の愛の世界を現実に生きようとして情勢が昂まった頂点で、その女主人が死んだのだから、エロードは生きる術を失った。それ故彼は二度に渡り剣を奪って死のうとするが失敗する。死刑を宣告した自分の口をののしり、人民に、天に非難の言葉をはく。エロードはユダヤの地全体に不幸がおこれと願う。マリアンヌは、エロードの宇宙に等しいのだから全宇宙が王妃の死と共に崩壊しても不思議はない。エロードの想像界がその糧を失ってくずれおちたのだから現実界においても同様の現象がおこらなくてはならない。それが、エロードの論理だ。自分も宇宙も、観念界と同じように破滅することを望む。虚像を現実から切り離せないでいる。

虚像を現実化しようとする肉体の欲求が強すぎて、エロードは精神構造を破壊されてしまう。虚構と現実の区別がつかなくなる。その結果、王妃が死去したにもかかわらず、二度錯乱して彼女に会いたいと言い出す。「会いたい」と願うことは、マリアンヌへの情熱が昂まっている印である。このエネルギーがあることで、我々は、彼が再び虚構を生きる方向に進んでいると知る。彼が現実の認識力を少しずつ回復し、王妃が死んだことを納得すると、そばにいるサローム、フェロールを追放する。マリアンヌの死刑を主張したのは彼等だったからだ。彼等は王の身の安全と王国の安泰をはかろうとする人間で、王に対し政治的役割をつつがなく課すよう忠告してきた。従ってエロードは、彼等を追放することで自分を社会から切り離し、王という資格を捨てたことになる。後に残るのは、エロードの宇宙像をこわす恐れのない身近な人間だけだ。彼は虚構の中にますます深くのめりこんでゆき、マリアンヌの像が祭壇を飾る神殿を作ろうと考える。王はマリアンヌの美しい姿

を思い浮かべ、実際に姿をみたくなる。そこで二度目の王妃を連れて来いという命令が出される。今回も、そばにいる者が王妃の死をエロードに教える。しかし、最早サロームはいない。一私人としてのエロードは、王妃を求める欲望を、虚構の中に注ぎこむ。彼は王妃の虚像が生きているかのように知覚し、彼女に話しかける。そして、昂まった情熱を燃やし尽くすと、再び気を失って倒れてしまう。

*　　*　　*　　*

エロードを実質的な主人公ととらえ、戯曲の主要部を以上のように分析した。エロードの心理時間は、マリアンヌとサロームの間を交互に揺れ動く往復運動によって構成されている。言い換えれば、宇宙という虚像を求める方向と、国を守る方向である。そして夢の受け取り方がその運動を方向付けている。虚像のマリアンヌを求めるが現実のマリアンヌに拒否されて、エロードは王の義務に立ち帰る。悪夢は逆境の前兆だと考え、王国を守備する側に回るのだ。しかし一方では運命に対する諦念を持っており、夢に見た災いが現実のものになっても仕方ないと思う。マリアンヌの実像を一目見れば、観念上の宇宙が再び息づくから、エロードは逆境など省みず、自力で虚構の世界に踏みこんで行くのである。悪夢を恐れるか、それが正夢となっても良しとするかによって、方向が変更される。１７世紀後半には見られない夢の用い方である。

エロードは自殺に失敗して、最終的に狂気の世界に入る。社会的束縛から解放されて始めて不安が解消し、虚構の深部に沈潜して行く。

ランカスターはエロードについて、「彼は恋する者であるばかりではなく、女主人公の運命を決定する力を自分の中に有している人物である。彼の役割は一定して大変ドラマティックであるためラシーヌのフェードルにも比較され得る」(10)と述べている。又、ベルナルダンが『トリスタン、レルミット』において、ラシーヌとトリスタンの作品を比較しているのは周知の事実である。ベルナルダンは、主に表現上の比較をしているが、それは彼にまかせるとして、ここではエロードに見られた心理構造の特色についてフェードルと比較してみたい。

フェードルもエロードと同様、戯曲の進行を決定する中心人物である。又、同じく心理面で対照的な二者の間を往復している。しかし彼女の場合はエロードよりずっと複雑な要素を両極に所有している。一言で表現すれば光と闇、太陽神とヴェニュス女神だ。例えば彼女がイポリートに恋をしたことについて考えてみよう。彼女がイポリートに捧げたのは肉体と精神を同時に満足させようとする愛であった。ところが、母親パジファエはヴェニュスに呪われてミノトールを生んだ女性だ。フェードルも母親の血を受けついで肉体面では情欲のとりこになる運命だと信じている。恋人への

情熱が昂まれば、呪われた本性を益々意識せざるを得なくなり、自己を断罪してしまう。フェードルの自己断罪の方法は、例えば三日三晩食事をせず眠らないという肉体を痛めつけるものだ。これは情熱を昂揚させる手段でもある。実際、寝室から出て来た彼女は衰弱していても、肉体は昂揚している。ヴェールが重いと不平を言う台詞でわかる通り、Ⅰ幕3場の彼女は自殺しようという決心とは裏腹に、情熱は昂揚の極みにあるのだ。愛を告白することでその情熱を燃焼する時は、彼女はパジファエと同じような恋愛をしてからヴェニュスに呪われて死ななければならないと思う。ヴェニュスと共犯者になることで生の証しを得、その後死のうとする。ところが実際に愛の告白をし、イポリートの拒否にあうと、≪現実≫を思い知らされる。彼女は太陽神の子孫に相応しい徳を備えた王妃でなければならなかった。従って、再び自己を断罪し、太陽神に一致しようとする。そして死ぬことにより死後の救済を求めるのだ。しかし前記したようにイポリートの剣を奪って死のうとする行為は、ヴェニュス女神に命じられたものでもある。フェードルは愛の告白をするのに女神と共犯関係になったのだから、その後も母親同様悲劇的な死を遂げなければならなかったのだ。

以上でわかる通りフェードルは太陽神を断罪者として把える時と、救済者として把える時があり、又ヴェニュス女神を本性的な罪を与えた神とする時と、共犯者とする時がある。この二面を持った神の間を、フェードルは生と死を求めて行き来するのである。

フェードルの愛もエロードの愛も、肉体面と精神面を持つことは先に述べた通りである。フェードルは自己を断罪することで情熱を昂め、エロードはマリアンヌに拒否されることで昂めた。そして両者とも初めて登場する時情熱が昂まっていることを我々に示している。フェードルはヴェールが重いと文句を言い、エロードは悪夢にうなされてである。ところで、フェードルは夢を見ない。眠りを拒否してあくまで目覚めていようとする。地獄の苦しみを味わうのは夢の中ではなく覚めた状態でである。彼女は本性まで呪われていると信ずるから自分の力を信用できない。何時も他者の目で自分を断罪するのだ。エロードの方は、運命に対し諦念を持っているものの、過去の経験から自力を信用している。従って自分の体を痛めつけたりはせず眠るし、そこで悪夢をも見ると考えられる。

フェードルもエロードも視覚的人間である。愛する者の実像を見ることで対象の永遠像を作っている。エロードについては前記したが、フェードルについては、彼女がイポリートに愛の告白をする場面を思い出せば理解できる。イポリートに若いテゼーを重ねあわせ、理想の恋人に話しかけている。彼女はその際現実のイポリートと対面しているが、話しかけているのは観念の中の恋人に対してなのだ。フェードルはこの時、恋人を一目見たなり動揺する程の昂揚感を体験しているが、終幕に近ずくにつれそれは失われて行く。秘密が胸の内にある時が一番情熱の昂まった時で、観念の

中の映像も鮮明である。ヴェニュスとの共犯による恋が太陽のもとにあばき出され、太陽神とヴェニュス女神の間を行き来する振幅が増大されると、不安ばかり募り、観念の世界を暖める余裕がなくなるのである。ところがエロードは罪の意識を持たないから自己を断罪しない。フェードルとは異なり肉体は解放されている。従ってマリアンヌの死で行き場を失った情熱は、彼の精神構造を破壊してしまう。≪現実≫との接触が絶たれて始めて彼は虚構の奥深くに沈潜でき、現実界で得られなかった楽園を見出すことになる。悪夢を見た時の不安は解消された。

フェードルもエロードも虚構を現実と区別できなかったが、一方は虚構を抹殺しようとし、他方はその中に分け入って行った。この相異は、フェードルには本性を断罪する超越神があるのに、エロードにはそれがない、フェードルは自力を信用できないがエロードにはそれができた、という事実に由来している。ラシーヌ、トリスタンという人間の差であると同時に時代的な差でもある筈だ。トリスタンの生きた時代は、貴族が一国一城の主であり得た時代で、彼等の一人一人が波乱万丈の生涯を送れた。トリスタンはバロック期に属する作家だったのだ。

＜注＞

(1) Lancaster : French dramatic literature in the seventeenth century, part II, vol. I, Gordian Press, 1966. p. 55.

(2) Scherer : La dramaturgie classique en France, Nizet, 1973. p. 137.

(3) Bernardin : Tristant L'Hermite, Slatkine Reprints, 1967.

(4) Lancaster : op. cit., p. 30.

(5) Tristant L'Hermite : La Mariane, Istituto Editoriale Cisalpino-Nizet, 1969.

(6) cf. ibid., v. 344.

(7) cf. ibid., v. 156-182.

(8) Hardy : Mariamne, Théâtre, t. I, Slatkine Reprints, 1967. Edition de Stengel, v. 937

(9) Tristant L'Hermite : op. cit., v. 1136.

(10) Lancaster : op. cit., p. 52.